

「戦時下の個人雑誌を読む」

大阪府立山田高等学校教諭

佐久間 俊明

ただいまご紹介にあずかりました、佐久間でございます。本日はお忙しいところお運びいただきまして、ありがとうございます。大阪からやってきました。私は二〇一〇年九月に総研大から学位を頂きまして、二〇一五年、その博士論文をもとに『清沢洌の自由主義思想』という本を日本経済評論社から出版いたしました。

清沢洌は、『暗黒日記』の著者として知られています。彼の自由主義思想とはどのようなものだったのかというのが私の博論のテーマでした。私の結論は、彼は社会民主主義の段階にまで到達した自由主義者だったというものでした。

日中戦争が始まると、なかなか自由な言論活動ができなくなります。そうなりますと、もちろん言説を分析することも大事ですが、博論では、清沢の行動や日常生活から少しでも彼の思想を読み解くことを試みました。今回は博論で採用した方法を生方敏郎に応用してみるという方法上

の実験をしてみようと思っております。

はじめに

まず本報告の目的ですが、生方敏郎が発行していた個人雑誌『古人今人』の戦前の部分を分析対象として、次の論点を検討します。

一点目は、戦時下の個人雑誌とは、いかなる特徴を持つメディアだったのか。二点目は、戦時下の日常生活（行動）も踏まえながら、『古人今人』に見える生方の議論の特徴と批判の論理をどのように整理できるか。生方は自身のことをユモリストと規定しており、ユモリストの社会批評を明らかにします。最後に、戦時下の生方の自由主義思想を明らかにし、さらに同時代の自由主義のなかにどのように位置づけることができるのかを考えてみます。

一 生方敏郎の経歴と個人雑誌『古人今人』

生方敏郎の経歴について、簡単に紹介しておきます。彼は一八八二年、群馬県沼田町に生まれ、一八八九年に上京した後、明治学院の普通部で学びます。一九〇二年、早稲田大学英文科に入学し、英仏文学を学んでいます。特にフランス文学が、後の言論活動に大きな影響を与えたようです。

一九〇六年に早稲田大学英文科を卒業。翌年、東京朝日新聞社に入社し、口語体で新聞記事を書き始めました。一九〇八年には島村抱月の早稲田文学社に移り、『早稲田文学』の編集者とし

もはじゃんけんで勝った時に、源平だったら源氏、官軍と賊軍だったら賊軍になる。私(生方)

子どもたちが戦ごっこをすると際にじゃんけんで二組に分かれるのですが、生方の地方の子ど

生方敏郎略年譜

- 1882 (明治15)年 群馬県沼田町に生まれる。
→上京(1899年)後、明治学院普通部に入学。
1902 (明治35)年 早稲田大学英文科に入学し、英仏文学を学ぶ。
1906 (明治39)年 早稲田大学英文科卒業(第2回卒業生)。
1907 (明治40)年 東京朝日新聞社に入社。新聞記事に口語体を導入。
1908 (明治41)年 島村抱月の早稲田文学社に移る。
『早稲田文学』編集者として評論・研究論文を発表。
1915 (大正4)年 初めての著書『敏郎集』を刊行。
1926 (大正15)年 『明治大正見聞史』刊行
*大正期にはユーモア小説を次々に刊行する。
1927 (昭和2)年 個人雑誌『ゆもりすと』を刊行(3号で中止)。
1935 (昭和10)年 個人雑誌『古人今人』を刊行
(~第135号, 1968年10月)。
1969 (昭和44)年 死去。

て、評論、研究論文を発表しています。
一九一五年に初めての著書『敏郎集』を出版し、
一九二六年、生方の著作のなかでは最も知られて
いる『明治大正見聞史』を刊行しています。大正
期にはユーモア小説を次々に公表したことで知ら
れています。

昭和に入り、一九二七年に個人雑誌『ゆもりす
と』を発行しますが、これは三号で中止になりま
す。一九三五年から刊行が始まった『古人今人』
は、戦後の一九六八年十月、第一三五号まで刊行
が続きしました。一九六九年に亡くなっておりま
す。

生方の著作のなかで最も有名なものが『明治大正
見聞史』です。今は絶版ですが、中公文庫に入っ
ています。そのなかで、鶴見俊輔さん、それから
安田常雄先生も引用されているのですが、戦ごっ
このシーンというのがあります。

の地方の子どもは、平家と官軍とにされることを大変屈辱と考えていた。日清戦争になるまで、私の周囲はことごとく反明治新政府の空気に満たされていた、と書いています（生方一九七八…二五―二六）。

最近、高校の歴史教育では国民国家という概念が重視されています。国民国家がつくられていく、日本国民がつくられていく過程が大切なんですね。明治維新になったからすぐに国民国家や日本国民ができるわけではありません。やはり憲法制定、日清戦争ぐらいの頃まではかかっています。そのことを生方は、子ども時代の、日常生活の一コマから鮮やかに描いてみせるわけです。ぜひお読みいただきたいのですが、生活の断片から時代の味、時代の空気を描くことに成功している本ではないかと思えます。

次に、個人雑誌の『古人今人』について紹介します。「源氏と平家」を連載していた『日本新聞』が一九三五年七月に休刊になってしまったことが、発刊のきっかけです。

「創刊当時は手紙代用と思ひ専ら先輩知己友人親族の間のみ発送した」ということですが、一九三七年以降、「知識的上層部」の人々に「現代社会の苦痛と要求」を伝え、社会を善導してほしいとの希望が生じたということです。上意下達という言葉がありますが、そうではなくて、「下情上聞」ですね。社会のさまざまな問題を上に伝えることで指導層に改善を促すというように、ねらい、目的が変わっていきます（第八六号・四三年十月）。発行部数は、創刊当初は一〇〇〇部、最大で二五〇〇部ということですが、

正面からの批判も非常に鋭いのですが、生方はユモリストと自己規定しており、諧謔による批

判に特色があります。川柳、戯れ歌、寓話などです。家永三郎さんは先行研究で、「落首だけは遂に禁止され、十五年（一九四〇年）六月の四六号を最後として誌上から消えた」と書いています（家永一九六四・九三）。しかし、管見の限りでは、第四七号に新体制批判の狂歌が、第五三号には風刺による時評が掲載されています。ねずまさしさんは、大正以後の風刺文学について、「西洋の思想をうけて、社会改造を求めるリアルで、合理的な、ヒューマニスティックな、戦争否定を特徴としていた」と述べています（ねず一九七八・三五七）。生方の諧謔による批判は、この系譜に位置づけられます。

生方の性格はかなりずぼらなところがあつたようで、『古人今人』は、記載された発行月日と実際のそれとは異なっています。一カ月近く遅れるのが通常だつたようで、この辺りは読む時に注意しないといけません。

では、どういう人たちが『古人今人』を読んでいたか。これはなかなか難しいのですが、一九四〇年十二月に、後援会「古人今人の会」を生方が作ります。その時に顧問を引き受けてくれた方々を挙げておきます。例えば後に陸軍大臣を務める阿南惟幾。満洲国経営で辣腕を振るつた企画院総裁の星野直樹。実業家では阪急の小林一三。作家では島崎藤村。ジャーナリストでは長谷川如是閑、石橋湛山。出版人では岩波茂雄。当時の指導層、エリート層の幅広い人たちが、読者としてこの雑誌を読んでいたことが分かります。

読者による生方評を紹介します。弁護士の本木ひろしは『近きより』という個人雑誌を発行しており、そこに次のような文章を残しています。生方がやって来た時のことですが、同氏はもう

還暦を超えられたらうと思われ、ご年配の上、極度の強い近眼で書物をまるでなめるようにして読まれるが、元気で記憶方よく、わずか一、二時間の会談であったが、談論風発、まことに壯者をしのぐものがあつた。この談論風発というのは、戦後、生方に会った人も語っていますので彼の特徴と言えるでしょう。また『古人今人』についても、まことに愉快的な雑誌だという評価を残しています（『近きより』三七年七月号）。

二 個人雑誌というメディア

本題に入る前に、個人雑誌というメディアの特徴を考えてみたいと思います。戦時下はマスメディアの時代で、そういう時代に個人雑誌はどのような特色を持っていたのかという問題です。

検閲はもちろんありますが、著者にとっては、やはりマスメディアに比べると比較的自由に言論活動ができる。テーマの設定であったり、分量など自由が利くことは確かだだと思います。

次に、読者と著者の双方にとって相手の顔が見えるメディアだった。つまり、書いている生方の側も読者がだいたいどういう人か分かっていますし、当然のことながら読者も生方がどういう人か分かっているという、相手の顔が見えるメディアである。

そして個人雑誌というのは、著者と読者、読者と読者をつなぐメディアとして機能していました。たとえば『古人今人』では、「知人消息」に毎号かなりのスペースを割いて知人の近況を紹介している。あるいは生方に購読料として寄付してくれた人の名前が書いてある。「謹賀新年」「寒中見舞」といった形で読者に名前を出してもらつた。

先ほど紹介した正木ひろしは個人雑誌の『近きより』を刊行していましたが、彼の趣味は絵を描くことで、戦時中に皇軍失明有志に感謝する絵画展覧会をやっています。失明してしまった兵隊さんに義援金を送ろうということで自分や知人が描いた絵を絵画展で売って、それで義援金を送る。この絵画展覧会を開くということが、『古人今人』の「知人消息」で紹介されているんですね（第九十号・四四年二月）。

あえてここでは読者参加型企画と名付けましたが、そのようなものも行っています。たとえば、生方の文筆生活三十年回顧記念展。彼の文筆生活三十年を記念して、知人から書や絵を出してもらって展覧会をやる。また、『源氏と平家』の出版。連載記事を最終的に単著にまとめるのですが、予約金を集めて刊行にこぎつける。後援会「古人今人の会」の設立。古典愛護会については後ほど説明します。

發送用封筒の提供ですが、日中戦争が始まるとしだいに物が足りなくなってくる。發送用の封筒も足りないとなると読者の方が封筒を送ってくれる。あるいは、読者の方が封筒をわざわざ生方の自宅まで届けてくれる。なかには自分で封筒を作って提供してくれる。そういう人たちが出てきます。読者に支えられて刊行することができたと言えます。

三 『古人今人』の分析

(一) 高円寺時代（第一号〜第二七号、一九三五年八月〜一九三八年十月）

ここから『古人今人』の分析に入っていきます。今回の報告を準備するにあたり、一九三五年

から四五年までをどのように区分するか。実は一番、ここに頭を悩ませました。メルクマールと
なるような出来事で分けていったほうが良いかなどいろいろ考えたのですが、ここであえて私は、
彼が住んでいた場所で区切るというやり方をとってみました。

最初に杉並区の高円寺時代、三五年八月から三八年十月にかけてです。生方のスタンスを最初
に紹介しておきますと、やはり典型的な自由主義者であるということが、転向への批判からわか
ります。「人の顔さへ見ればマルクスマルクスと囁つてゐた連中で、今や日本精神とか国体明徴」
と言っていると、「振子人形」（第一号・三五年八月）という文章のなかで皮肉を込めて述べてい
ます。

また「中庸」（第一号）という文章のなかでは、「現代人は、何でも極端なことが好きだ。「中
略」偏せず党せず中正の道を行かうとする者は、誰からも顧みられない」。生方自身は偏せず党
せず中正の道を行こうとしているのですが、誰からも顧みられないと。

生方の歴史観はなかなか面白くて、「源平時代史」研究の意義について、「文教政治は日本肇国
の大精神に則るものであつて、武断政治は武士階級中心主義に依る変態政治」である、つまり、
武断政治は変態政治だと述べています（第一号）。

そして源平時代は、「日本で初めて暴力が理性に勝つて、之を踏みにちつた時代」、「伝統も学
問も道徳も制度も宗教も、武士どもの暴力の前には、颯風が草木を薙ぎ倒すよりも容易に、ひし
ぎ挫かれた時代」である（第十一号・三六年八月）。これを昭和十年前後の文脈で読んでみると、
生方は明らかに、変態政治である武断政治が始まった源平時代と軍部が台頭しつつある現在とを

重ね合わせて描いています。つまり生方の源平時代史研究には、彼の現在に対する問題意識も反映されているのです。

同時代批評で面白いのが「奇絶快絶鬼ヶ島退治」（第五号・三五年十二月）という文章で、これは桃太郎の話のパロディです。皆さんご存じだと思いますが、桃太郎の話は、最後は鬼ヶ島を占領して、金銀財宝を持っておじいさんとおばあさんのもとに帰り、めでたし、めでたしと終わる。

しかし生方の桃太郎はそうならないですね。桃太郎が「鬼軍」に勝利をして、鬼ヶ島を占領した。ところが宝物がない。なぜかというところ、西境の「豚尾民国將軍」と北隣の「赤熊共産党書記長」に略奪されてしまった。ここで読者は、これは蒋介石とスターリンのことを指していることに気付く。そうすると、鬼ヶ島は満洲なんだ、ということになるわけです。

やむなく桃太郎は鬼ヶ島の経営に乗り出す。ところが匪賊の絶え間ない反乱に悩まされてしまう。桃太郎は「翁」と「媼」に、これは日本なのですが、軍用金を無心する。最後にどうなるかというと、鬼と犬、猿、雉が「翁」と「媼」のところに行つて軍用金を取ってくる。それで鬼ヶ島に向かうところで終わります。

文末に、「お約束の非常時／一九三五年末作」と書いてあります。一九三五年、三六年の危機といつて軍部や右翼勢力が軍備拡張をおおったことを踏まえると、軍備拡張論への批判と読むこともできます。さらに言えば、少なくとも生方から見ると、満洲経営はうまくいっていません。解釈することもできると思います。

この時期の彼の評論の傾向を一言でまとめると、横暴な軍部とだらしない政党、ということになります。政党批判としては、まだこの当時、帝国議会の議事堂は日比谷にありましたが、議会のことを蛙会と呼び、「力なき／日比谷ヶ池の／雨蛙／よしなしごとを／騒ぐ今日かな」（第五号）と議会の招集にあたって、政党を批判しています。

一九三六年の二・二六事件を契機に軍部批判が増えてきました。たとえば、「叛兵」（第八号・三六年三月）という歌では、次のように批判しています。

文句付けて／人こそ殺せ／わが腹は／切るすべ知らぬ／此ごろの武士

武士道は／腹切るものと／思ひしに／腹は切らずに／演説をする

また二・二六事件の首謀者を生方は真崎甚三郎と考えており、足利尊氏に真崎をなぞらえて、つまり逆賊だという文章を二本、発表しています（第八号、第十三号・三六年十二月）。

発禁処分を受けたとされる第十三号では、軍部のことを「さあべる」「鈍刀」「さび刀」「なまくら」という表現で厳しく批判しています。「蚊の呻り」という狂歌を見ますと、「世の中に／かほどいや味な／やつはなし／グンプグンプと／のさばり廻る」という、寛政の改革の時に必ず紹介する狂歌のパロディが載せられています。

ここでは「鈍刀の歌」を紹介したいのですが、これがなかなか強烈です。

非常時々々と／さわいだ揚句／ひじやうじを／作りいだせり／腐れさあべる

甘やかし／おけば無暗と／つけあがり／みのほど知らぬ／くされ鈍刀

国内ぢや／ふんぞり返り／威張つても／外へ睨みの／きかぬさあべる

内閣を／いちめることは／上手だが／外へ対しちや／へぼなさあべる

威張るやつ／サアといふ時／弱いのは／芝居みてさへ／知れたことなり

滅相な／彪大よさん／要求し／支那さへ討てぬ／錆びたさあべる

横暴な軍部を徹底的にこき下ろしています。

一九三七年一月、広田弘毅内閣の寺内寿一陸軍大臣と衆議院議員の浜田国松が議会で腹切り問答を繰り広げましたが、生方は浜田国松を「国民の／代表として／国松は／言ふ可きことを／よくぞ言ひける」(第十四号・三十七年二月)と評価しています。

この腹切り問答の結果、広田内閣は総辞職をし、次に宇垣一成に大命降下が下るのですが、陸軍が大臣を出さないで不成立になった。そのことについて生方は、「自由主義の／堤防終に決潰す／ふあしよの濁流／滔々として」(第十四号)という句を読んでいます。

この後、陸軍出身の林銑十郎内閣が登場してきますが、林とお囃子をかけて批判するんですね。「さあべるで／太鼓た、けば／ロボットが／ひよこひよこおどる／ばかばやしかな」(第十四号)と、お囃子と林銑十郎をかけている。この林内閣は、予算が通過した後に衆議院を解散する。

「食い逃げ解散」というのですが、それをやるわけです。政党のだらしなさを生方は「解散」(第十五号、三十七年四月)という文章で批判しています。

ふまれたり／蹴られた上に／御用達し／かいさんに逢ふ／間拔づらかな

与党でも／ないのよさん／通過させ／御用つとめても／この始末なり

くにたみの／うれひを無視し／よさんあん／可決したのに／あ、それなのに

出直して／おと、ひ来いと／突き出され／やうやく夢の／さめたせいたう

「あ、それなのに」というのは実は当時の流行歌で、そのタイトル、サビのところは巧みに織り込まれています。一方で無産政党的社会大衆党の躍進は評価しています。

この時期の生方の評論のなかでとくに面白いのが、「愛国行進曲を罵る」(第二一号、三八年三月)です。「愛国行進曲」は、一九三七年に内閣情報部が募集した愛国歌の当選作品で、翌年に大流行して敗戦まで盛んに歌われました。正面から歌詞を批判している点に特徴があります。

第一節に、「見よ東海の空明けて」と夜明けの景を叙するのに「旭日高く輝けば」と受けてゐる。夜明けだといふのに日が高く登る筈がない。旭日は高いところに在るものではない。高く登れば已にそれは旭日ではない。「中略」又「輝けば」と云ふ言葉も午前九時以後の太陽で、安月給のサラリーマンが惶て、省線の駅へ駆け付ける頃、大空で笑つてゐるところの太陽がそれだ。「中略」之では第一節の起句からして、愛国行進曲ではなく立派なウソツキ行進曲に成つてゐる。「中略」

第四句の初めに「征け」とあるのは一体何処へ行けと云ふのか、又わざわざ征の字を用ひずとも行けなら行けで沢山だ。特に征の字を用ひたのは何処か征伐しろと云ふのかそれだと直ぐその次の「平和うち建てむ」と平仄が合はない。次に「理想は花と咲きかほる」とあるが、その理想の内容は何か。それが明示されないでは甚だ危険だ。現代人には西洋かぶれしてゐる者が多いから、西洋の理想を理想とする人々があり、共産主義も其一つだが、まだフアツシヨだのナチだの其国々では立派な理想だらうが、之を日本に直輸入されてはたまらな

い。日本精神を偽装してファッショは花と咲き薫るとは、実に痛嘆すべきではないか。

ここでは抜粋して紹介しましたが、この文章のなかで生方が最も批判しているのは、日本精神を鼓吹する「愛国歌」として作られて当選したはずの「愛国行進曲」に、キリスト教やファシズムの思想が盛り込まれていることでしょう。作者よりも選者の思想に対する無定見さを批判しています。この評論は読者からは好評だったようで、手紙のほかに寄付金が届いたようです（第二四号・三八年七月）。

ただ、生方が自由な言論活動ができていたかという点必ずしもそうではありません。「丸々」という文章（第十八号・三七年十月）のなかで「丸々の世の中にこそなりにけり。何を言うにもみんな丸々。歌いたきこと多かれど、この頃は丸々なれば丸々にせん」と記しています。これは伏字のことを指していると思うのですが、自由な言論活動ができなくなっていることを語っています。

（二）松原町時代（第二八号〜第五五号、一九三八年十二月〜一九四一年四月）

次に世田谷の松原町時代、三八年十二月から四一年四月になります。第二次世界大戦の開戦後、ドイツを批判する風刺詩を掲載しています（第三六号・三九年八月）。

去らば去れ／ドイツ無しとて／日本は／大手を振つて／歩く世界ぞ

偽りの／仮面を捨て、／共産と／馴れ合ふ醜の／ナチスなりけり「中略」

ポーランド／苦戦なれども／ワルソウは／いまだ落ちずと／聞くぞ嬉しき

ベルリンの／戦況電報を／信じるな／うそはナチスの／国語にしあれば

独軍の／機械化部隊／粉碎し／ポーランドを救ふ／術なきものか

今度こそ／義兵を起し／英と仏／ポーランドを救へ／不義の暴力から「中略」

宣伝ビラを／播くのもいゝが／英空機よ／何うせ落すなら／爆弾を落せ「中略」

ドイツ国／よき国なれど／篡奪者／元兇の故に／汚れたりけり

米も加も／早く参戦し／独裁者の／兇徒を撃ちて／救へポールを

独裁と／暴力と詐偽の／元兇が／亡びざりせば／道や亡ひん

元兇の／いづれ行くべき／沖つ島／セント・ヘレナの／秋の夜の月

後半に登場する「元兇」、「独裁者」、「独裁」という言葉に「ゼンたいしゆぎ」、「兇徒」には「ナチス」というルビを振って、ナチ・ドイツを徹底的に批判しています。さらに、ヒトラーをナポレオンになぞらえて、彼の没落を暗示しています。一方、返す刀でポーランドを併合したソ連も批判しています（第三九号・三九年十一月）。

ぬつと出て／獲物をさらふ／すたありん／ずるさにどいつも／こいつもあきれん

きくたびに／気がへるしんき／ろすけめが／のさばりかへる／北欧の空

ドイツとソ連の双方を全体主義として批判しています。

そして翌年は新体制運動、大政翼賛会結成と進んでいくわけです。発禁処分を受けたと言われている第四七号（四十年七月）では、「又々御神燈」という歌のなかで近衛新党を作ろうという動きに対して、新党と御神燈をかけて批判しています。

あかくして／無色にみえる／しんとうは／できぬものかと／近衛屋の客

どのくにの／第五部隊ぞ／あやしげな／しんとう作ると／さわぐガキめらは

新体制運動に対しては共産主義的だという批判が起るのですが、近衛のブレンたちが「無色」に見せるように思案していることを皮肉っています。「第五部隊」というのはスパイのことなのですが、新体制運動の背景に暗躍していると批判しています。

「バスに乗り遅れるな」というスローガンがはやるのですが、それを受けて「バス」（第四七号）という歌では次のように批判しています。

おくれずに／のりはのつたが／ほろバスよ／何処へゆくやら／おさき真暗

越のきやく／呉の客のせた／ほろバスは／仲間げんかの／準備会かよ

大政翼賛会の準備会を呉越同舟だと皮肉っているわけですね。この当時、翼賛会は赤だ、共産主義だという批判があつたのですが、生方はそれには与していません。むしろ私有財産は制限するべきだと言っています（第五三号・四一年二月）。なぜ彼が新体制運動、特に翼賛会を批判しているのか。議会政治擁護の立場をこの段階でも彼はとっていて、その観点から翼賛会を批判しています（第五四号・四一年三月）。

この時期の生方の批判のなかで一番面白いのが、「ガリヴァ巡島記補遺」（第五三号・四一年二月）という『ガリヴァ旅行記』のパロディです。これは鶴見俊輔さんも紹介しているのですが、一本足の国にガリヴァが行くという話です。

彼〔ガリヴァ——引用者注〕は馬の国を見廻つた後、一本足の国へと舟を着けた。此嶋人も

昔は普通人の如く二本足だつたが、或時代に何事も一元的でなければならぬといふことになり、

人々は強制的に一本の足を切り捨てて、残りの一本足で歩くことになった。従つて歩くのではなくピョンピョンはねて進むのだけが見てみると危なかしいが何うやら歩く。そして転ばぬ先の杖を皆持つてゐる。子供も青年もだ。

その杖をみると、一億一心翼賛会と記してあつた。

土人に国の名を訊くと、いつぽん国と答へた。

敏郎曰く、我国はにつぽん国なれば二本足にて歩き、政治も貴衆両院、軍も陸海軍何事も仲よく二本建にて行くがよろし。

これはもうお読みいただければ分かると思いますが、生方は明らかに、今の日本が一元化した一本国と捉え、先行きが危ういという見通しを示しています。一億一心翼賛会も、大政翼賛会のパロディです。

(三) 志村時代(第五七号〜第二〇二号、一九四一年五月〜一九四五年八月) ※第五六号は欠番
次に板橋区の志村時代です。実は私はこの時代が一番大事ではないかと思つています。これまでと違うのは、志村の自宅にはガスが通っていませんので、炊事にものごく手間がかかるわけですね。火起こしからやらなければいけない。人手不足で、女中がいなくなります。そうになると生方自ら自炊をしないといけないので、行列に並んで買い物をせざるを得なくなつていく。

志村は工業地帯で、生方は産業戦士と呼ばれる工場で働く若者にいろいろな場面で接することになります。これが生方の批判に大きな影響を与えていきます。

また封筒が足りなくなつてくることが顕在化してきます。『古人今人』を毎月一回発行するこ

と自体が抵抗と言えるでしょう。生方本人は、戦後、家永三郎さんの聞き書きに「太平洋戦争が始まってからは抵抗をやめた」と回想しています（家永一九六四・九三）。しかし、『古人今人』を見る限りでは、生方の抵抗はアジア太平洋戦争中でも継続していたのです。

風刺を使った批判はできなくなるのですが、たとえば「片翼思想」（第六八号・四二年四月）という文章が翼賛選挙の直後に載っているのですが、翼賛議会には右翼しかいない、左翼というものが全くないということを行っているわけです。

近頃新聞で代議士当選者を見ると、たゞ右翼といふものばかりしかない。左翼といふものは全くない。〔中略〕

若し鳥の左のハネを切つて落せば、中心はや、右に片寄り、胴体に近い横ツ腹あたりが左翼と見らる可きだと思ふ。

元来左翼右翼といふ言葉は議席の位置から起つた言葉だが、日本の議会では右と中とにばかり坐つて、左の議席は空にして置くつもりかしら。

誰も彼も左翼といはれるのを恐れて、それで右翼と名宣るらしい。それなら右翼でなくして怯翼とか懦翼とか弱翼とかいふもので、軍国議会に不必要な翼だ。

東条政権下の一九四二年という時期を考えると、相当に思い切つた批判と言えるでしょう。

重要なのは、「下情上聞」という視点からの戦争指導批判が、この時期になつてくると強まってきます。戦争指導の問題点を民衆の視点から提起し、改善を促す。そういう論考が増えていきます。

「本誌の目的」(第八六号・四三年十月)で、生方本人は次のように言っています。「何となれば、私は無位無官無財産であるのみならず、陋巷に住み平民と交り八百屋魚屋の尊顔を拝しメンチカツレツ屋の前に作られる一列に伍し、煮物屋の店頭で自由販売の品物をのぞき込み時には梅敷食堂に産業戦士たちと並んで食べ、雨に濡れつつ列を作つてバスを待ち、或時は買出部隊から実話を聞き或時は被整理商人から又或時は徴用候補者の心境を聞く等、下情は耳に満ち目に余るのであるから真に盛れ上る嘆きも要求も之を上部へと伝達するに好都合な位地に私は立つ思ふからである」。つまり民衆と接する機会がある自分は、下情を上へ伝える上で好都合な位置に立っていると言っているわけです。

食生活へのこだわりがあり、「庶民の生活は先づ何よりも食物だからだ」と生方は言っています(第八九号・四四年一月)。たとえば買物行列ですね。何時間も買物をするのに並ばないといけない。また、食事に行く時に店の前で並ばないといけない。

それから質の悪い加工品を批判し、近所の八百屋や魚屋が、この時代の主婦たちにとっては「現代の暴君」であると述べています(第七十号・四二年六月)。また公衆食堂で産業戦士が食事をとるわけですが、その食事が劣悪である。厚生省の役人に公衆食堂の視察を呼びかけています(第七八号・四三年二月)。しばらく経って厚生次官から返事が来て、改善されたと生方は書いています(第八五号・四三年九月)。おそらく一時的な現象だとは思っているのですが。

為政者への批判として清沢洸も引用している「孟子を読む」(第八九号)という文章を紹介し、これもなかなか厳しい批判です。

何としても今のやうに食物が窮屈では人心落着かず、イザといふ場合何かしら勃発しさうに思はれ、何となく危険が感じられてならない。「中略」

それ故私は何よりも現代に於いて望ましいことは、食生活を司る人々、及び現に権力勢威ある人々が、配給以外の一粒の米一片の副食物をも自宅へ入れず、外でも決して口に入れぬことを明治神宮に誓ひ、たとへ十日間でも実行してみても貰ひたいと思ふ。さうすれば今年に入つてからの社会不安は一掃されやう。外的以上に恐るべきは飢餓に惶てる窮民の嘆きだ。

良将は戦線に在つて一兵卒と同床に臥し同飯を食するにあらずや。銃後も亦た之に習へ。

つまり上層部に対して、配給だけで生活しろということ言うわけです。ちようどこの箇所を、清沢は『暗黒日記』で引用しています。

戦時下の社会でみられた、反知性主義の風潮に対しても厳しく批判をしています。たとえば学問、教育の重要性ですね。官立、私立のいずれにも大学院を置くべきである（第七七号・四三年一月）。また英語を学ばせて、米英の知識学問を吸収していくべきである（第八二号・四三年六月）。日本の教育は知育偏重と批判されるが、実は知育がはなはだ不足している（第八二号）。

言論統制への批判と批判精神の堅持を彼は最後まで持つていました。「戦争とは何か」（第八九号・四四年一月）という文章で清沢が『暗黒日記』に引用したところが次のところです。

それは此三四年以来、紙の不足を名にして言論機関を惜しまぬことだ。中には消滅してよかつたものが多々ある。併し中には惜しいものも多々ある。今残存してゐるものが果して貴いもののみか。必ずしもさうでない。此統制はメチャメチャだ。良きもつぶされ悪きもつぶ

され良きも残り悪きも残る。即ち盲目的に統制されたのだ。

二た言目には紙の節約といふ。借問す、紙と思想と何れが尊きかを。

紙を以て思想より尊しとするほど、世に唯物的な考へ方があるか。かかるバカげた、而して知識学問に対して不遜な考へ方は日本創まつて以来、未だ曾て無かつたことだ。

乳臭児どもの権力を弄すること、遂に此所に及べるかを思ひ、公論を天下に求め国民の学問知識の進歩を常に励まさせ給ふた明治大帝の聖恩を仰ぎ奉りし我等の若かりし幸福な時代を顧み、そぞろに血涙の膝に落つるを禁ぜざるものがある。噫。

傍線部は、清沢が深い共感をもって抜き書きの際にわざわざ赤線を付したところだ。

「言論暢達」(第九六号・四四年八月)という文章のなかで生方は「昭和七年五月以来この暗い十数年の間に、私はもはや『思ふ存分』といふものを自分の心の中から失つてしまつたらしい」と書いています。一九三二年五月ですから、五・一五事件ですね。それ以降は、思い切り自由に論じることができなくなったと生方は言っているのです。

また、空襲に備えて和漢洋の古典を疎開させるために、古典愛護会の設立を提案しています(第八六号・四三年十月)。貴重な書籍を空襲から守りたいという思いからの行動ですが、結局、疎開は実現せず、一九四五年四月十四日の空襲で生方の自宅は焼失し、蔵書三〇〇〇巻が失われます(第一〇二号・四五年八月)。

読者の反応について紹介しておきましょう。谷萩那華雄(大本営陸軍報道部長)は『改造』という雑誌をつぶしたことで知られている人物ですが、彼から「相共に協力せよ」というハガキ

が届いています（第七七号）。このような形で圧力をかけているのです。或年の或日に来た「憲兵さん」は、「古人今人は面白いが分る人には分り、分らぬ人には分らぬ。それ故最高知識階級指導者階級を対手にするのが宜しからう」という感想を述べています（第七九号・四三年三月）。

近衛文磨は激励の手紙とともに、金二十万疋を寄付しています（第九七号・四四年九月）。幣原喜重郎は「明治話」が面白いとの手紙を送っています（第九九号・四四年十一月）。指導層のなかで、特にこの時代、不遇をかこっていた人から好意的な評価を受けていたという感じがします。

清沢は先程紹介した二つの史料を『暗黒日記』（四四年三月十九日）に引用し、「比較的によく思い切って書いてある」、「一寸痛快なことを書いています」と評価しています。『古人今人』に関して、「これは最近出た最も思い切ったものだ。こうしたことを書くので、この小型四ページの雑誌に、案外支持者が多く購読料を寄附している」と書いています。清沢も『古人今人』の初期の頃からの読者で、『源氏と平家』も予約金を払って購入しています。

おわりに

生方敏郎の議論の特徴と批判の論理をまとめます。高田寺時代は風刺を多用しながら、軍部の台頭と政党の衰退を批判する言論がみられました。松原町時代も風刺を用いて、第二次世界大戦におけるドイツとソ連の動きや新体制運動、大政翼賛会について批判的に言及しています。日本のファシズム体制を批判した「ガリヴァ巡島記補遺」は、戦時下における生方の言論活動のなか

で最も精彩を放っているのではないのでしょうか。

志村時代に入り、風刺による批判はできなくなっていますが、工業地帯で民衆と接する日々の生活のなかで、政府の戦争指導の問題点を、具体的に民衆を代弁する形で指摘し、改善を求める「下情上聞」という視点からの批判が見られます。その問題点の指摘は、民衆の視点を組み込んだ、非常に重い批判であると私は思います。

この『古人今人』に関しては、紅野敏郎さんが「第二次世界大戦下においても平和主義に徹した」という評価を残しています（『日本近代文学大事典』）。しかしながら、アジア太平洋戦争直後の興奮に生方も引きずられてしまっているところがあり、戦時下の生方を平和主義とまでは評価できません。ただ、なぜ紅野さんがこのような評価を下したかという点、実は生方は、第二次世界大戦後、憲法第九条を一貫して擁護していた。おそらくそこからさかのぼって、このような評価をしたのでしょう。

最後に、生方の「自由主義」について整理します。まず押さえておかなければいけないのは、昭和十年前後の時期、自由主義者は、はっきり言って評判の悪い言葉です。批判する側がレッテル貼りをする時に使う言葉です。一言でいうと、もう時代遅れの人ということなんです。

そういう状況のなかで、自由主義者と自己規定した、数少ない知識人の一人が生方でした。自由主義を、多くの知識人は理論体系として受容するわけです。鶴見俊輔さんは「学習した自由主義」と批判しています。そうではなくて、「ハビット・オブ・マインド」（心の持ち方）、「フレイム・オブ・マインド」（心構え）、あるいは「方向感覚」としての自由主義。自由主義といった時

に大事なものは、やはりイズム以前なんですよ。生方も自由主義をイズム以前の次元で直感的かつ身体的に捉えているんです。内面化した自由主義は、行動のすみずみにまで現れます。

多田道太郎さんは、文化や生活の細部にまでしみ込んだ自由の感覚を重視しています（多田一九六五・一一）。生方も自由の感覚を持った人物の一人でした。ただ注意しないとイケないのは、状況に追隨してしまってしまふところは、どうしても戦時下はあるわけです。その時に歯止めをかけるものは何かというと、藤田省三さんは自己批判能力だという指摘をしています（藤田一九九七・一二六）。自分を顧みる力です。生方は、この自己批判能力も持っていたと私は考えています。

具体的な内容に入っていきます。政治に関していうと、議会政治、政党を批判はするのですが、否定していません。一九三〇年代は議会政治の評判が非常に悪いのです。決められない政治だとナチスが成功している。スターリンのソ連も五カ年計画で成功しているように映る状況で、議会政治の評判が悪い。そのなかで、批判はするけれども否定しない。無産政党の躍進に対しては肯定的です。議会政治、政党を否定しないということは、裏返していうと大政翼賛会は批判するということになります。

経済に関しても、資本主義を擁護するが私有財産の制限を主張し、いわゆるレッセフェール型の資本主義に対しては批判的である。外交に関しては、全体主義批判。今回は紹介できませんでしたが、イタリアも批判しています。イタリア・ドイツ、それからソ連の双方を批判している。

思想、言論、研究の自由に代表される市民的自由というものを、生方も重視していました。生

方の言論活動をどのように評価するかはなかなか難しいのですが、向坂逸郎さんは、個性に応じて抵抗の型があるという言葉を残しています。生方も、ユモリストという一つの個性に依拠して抵抗をしたのではないのでしょうか。

最後に戦時下の個人雑誌ですが、これは決して生方個人で自己完結していたわけではありません。この後、報告される大串潤児さんの報告にも出てきますが、戦時下の個人雑誌はある種のスペースだと思います。つまり生方という私と、それ以外の私、読者ですね、そういう人たちが交差するスペースとして機能したのではないかと私は思っております。

報告を終えるにあたり、最後に個人的な感慨を二つほど申し述べることをお許しただけだと思います。この歴博／総研大の講演会は、ちょうど二十年ほど前に、私の恩師の安田常雄先生が登壇されました。その時の記録を今日持ってきたのですが、実は私もそのなかにおり、聴衆の一人として聞いていたのです。まさか二十年経って自分がこの場で話すとは思っておりませんでした。今日はこのような機会を与えていただき、大変光栄に思っております。

またこの歴博の講堂は、私にとって非常に思い出深いところです。毎年三月にこの歴博の講堂を貸し切って、安田先生のゼミで映画会をやっていたんですね。「映像でみる現代史」と題して『飢餓海峡』や水俣のドキュメンタリー映画、ヴイム・ヴェンダース監督の映画などを見る会をやっていました。非常に思い出深い講堂で講演をさせていただき、本当にありがとうございます。お聞き苦しいところもあつたかもしれませんが、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

参考文献

- 家永三郎「戦時下の個人雑誌」『思想』No. 四七五、一九六四年一月
- 生方敏郎『明治大正見聞史』（中公文庫、一九七八、初出一九二六年十二月）
- 「生方敏郎氏を追憶して」上木敏郎編集・発行『土田杏村とその時代』第十二・十三合併号、一九七〇年三月
- 北河賢三『戦争と知識人』（山川出版社、二〇〇三）
- 佐久間俊明『清沢洌の自由主義思想』（日本経済評論社、二〇一五）
- 高橋新太郎「解説——普段着の抵抗・生方敏郎『古人今人』（『復刻版 古人今人』不二出版、一九九〇所収）
- 多田道太郎「日本の自由主義」（多田編『現代日本思想体系 十八 自由主義』筑摩書房、一九六五所収）
- 鶴見俊輔「衰えかたについて——「古人今人」（鶴見『日本の地下水——ちいさなメディアから』編集グループSURE、二〇一三、初出一九六一年十月）
- 同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究』全二卷（みすず書房、一九六八―一九六九）
- ねずまさし「解説」（生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、一九七八所収）
- 〔報告〕藤田省三・〔討論〕丸山眞男・石田雄・藤田省三「近代日本における異端の諸類型」（『藤田省三著作集 十 異端論断章』（みすず書房、一九九七所収）
- 松沢弘陽「自由主義論」（『岩波講座 日本通史 第十八卷 近代三』岩波書店、一九九四所収）

安田常雄「戦時期メディアに描かれた『男性像』」(阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史
ニモダニズムから総力戦へ』日本経済評論社、二〇〇七所収)